論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

論文題名

『源氏物語』の死と身体

論文審査の要旨

本論文「『源氏物語』の死と身体」は全三章十節と補論からなる。第一章「『源氏物語』の死者をめぐる表現―「から」と「かばね」、「ほね」と「こつ」」の第一節「『源氏物語』以前の物語作品との比較」と、第二節「『源氏物語』と同時期の表現」では、『源氏物語』における、「から」(十八例)、「かばね」(三例)、「ほね」(一例)、「こち・こつ」(一例)という言葉の用法を検討している。比較の対象は、『伊勢物語』『大和物語』『うつほ物語』『栄花物語』『大鏡』『蜻蛉日記』『枕草子』、そして漢文日記の『小右記』である。『源氏物語』では、「から」は「魂」の抜けそうな、あるいは抜けた状態を表し、蘇生可能の身体であるとし、「かばね」は蘇生不能な遺骨を意味するという。また他のテクストにもそれ独自の用法があることにも言及している。

第二章「死と身体」の第一節「葵上―腐敗と弔い」は、源氏の正妻葵上の死をめぐる表現構造を分析したもの。蘇生の不可能性を示す腐敗する身体、それを凝視しつづける人々、弔いの様子、火葬の煙をみての人々の哀傷、「亡き魂」の処理の問題、さらには死者への回想……という一連の表現のもつ意味が検討されている。そして、『源氏物語』のなかで唯一すべてが揃った葬送儀礼として葵上の死が位置づけられている。第二節「玉鬘・柏木―ささやかれる足の不在」は、全体の中でやや異色な論。人にされるがままに、「足立たず」して「臥す」状態で登場した玉鬘だが、長谷寺には徒歩で参詣して足の痛みを克服、最後は源氏の六条院世界に、「根をとどめ」るという。一方、柏木は逆に、六条院での蹴鞠の場では、その「足技」を絶賛され、そして女三の宮との密通にいたるも、その後は「足病」のために立つこともできずに亡くなる。「足」という身体表現一本を以てして論じきった『源氏物語』論。第三節「夕顔―死者との再会」は玉鬘十帖のなかの一巻「篝火」の論である。玉鬘の「髪」の「冷やか」な手触り、消えかかる「篝火」とその「煙」、魔除けの「檀の木」、玉鬘と源氏の贈答歌、頭中将の登場……という物語の展開に、「夕顔」巻との対応関係を検証し、「篝火」が夕顔の降霊とその成仏を祈る巻と位置づける。第四節「紫上―繰り返される仮死」は、「若菜」下巻で、紫上が亡くなったとの「噂」がたつも、結局は蘇生する。紫上の仮死の身体をめぐって、生と死の境界領域とは何かを問うている。

第三章「骸の系譜」の第一節「落葉宮―死者との一体化願望」は、一条御息所と娘落葉宮との異常なまでの一体化願望の質を問うことで、夕霧物語を解読せんとしたもの。母の「骸」に「添ひ臥」し、その死に「後れじ」という落葉宮、さらに火葬の煙にも一体化せんとしている落葉宮、そして最後は母胎内に等しい「塗籠」に閉じこもるも、夕霧により闖入されてしまうという読みを提示している。第二節から第四節は『源氏物語』続篇(「匂宮」から「夢の浮橋」までの十三帖)の「宇治十帖」論が並び、まず第二節「八宮―骸の不在、父の幻影」では、落葉宮の母の「骸」への執着という前節の問題をふまえて論を展開させている。宇治八宮の死に際に、娘姉妹たちは煩悩を生むということから、父の遺体をみることをゆるされなかった。しかし、であるからこそ逆に大君は父の死を受けいれられずに、その「骸」を永遠に求めつづけることになるという。第三節「大君―共有されない薫の思い」も「骸」という観点からの宇治十帖論。薫は大君の死にいたる経緯を側近く見つづけ

る。その遺体は、「中に身もなき雛」「虫の殻」と表現され、しかもそれを永遠に保存したいとまでいう。火葬の煙もあっけなく、その死を納得させるようなものではなかった。その後の薫は大君の「魂」の問題を云々することなく、大君の「骸」に執着し、その「人形」をも制作しようとする。かくして、薫のかかるフェティシズムが浮舟の登場を必然化していると読む。第四節「浮舟―生きる骸」は、『源氏物語』の掉尾を飾る浮舟物語の新たなる読みの呈示。浮舟は入水死したとされ、葬送が行われるが、実際には亡くなっていない。塩見氏はその葬送が「骸」のない偽の葬送である点に着目する。まず薫にとっての浮舟は大君の「骸」の現前であり、浮舟失踪後も相変わらずその「骸」を求めることをやめない。他の人物たちも、浮舟の死に納得したわけでなく、「骸」の所在を求めて同じく彷徨しつづける。また、正体不明の女体(浮舟)を発見した横川僧都一族の人々も、僧都の妹尼の生き方に端的に表れているように、亡き娘の生き返りと浮舟をみなし、また娘の元婚約者にあっても同様の欲望を生きる。彼らは愛する者の死を受けいれることができず、いまだその「骸」に執着し、そのイメージを浮舟に被せんとしている。一方、浮舟自身も生きることの苦悩からの脱出をはかったとはいえ、死ぬこともかなわないという中途半端な状態で浮遊しつづける。死からも疎外され、死をも受けいれることができないという窮極の迷いの世界を、偽の葬送というかたちで物語は顕在化させていると説く。

補論「『栄花物語』死者を抱く―子を看取る親をめぐって」は、死についての描写がこの物語に多いことを確認したうえで、とくに死にゆく子を親が「抱く」という例に注目して、蘇生を祈ってのものとする。さらに死産の子を出産で亡くなった親に抱かせて一緒に埋葬する場面が『栄花物語』に一例あることを報告している。

平安時代の葬送儀礼を研究するための一資料として、史学や民俗学の分野において、『源氏物語』を利用することは珍しいことではない。しかし、本論文で試みられているのは、『源氏物語』というテクストにおいて、「死」というテーマがいかに本質的であるかの確認にある。もちろん、死についての表現に注目したものや、登場人物の死の意味について論じた研究はこれまであった。しかし、それらは単発的な指摘でしかなく、「死」なるものをして、『源氏物語』総体を読破せんとしたのは本論文が最初であり、しかもその分析は、身体表現(髪・声・動作・衣装等)から始め、弔いや火葬の様子、さらには残された者たちの反応……というように徹底したものとなっている。本論文を読むと、『源氏物語』のすべての言葉が死をめぐって組織され、そして登場人物たちは死ぬためにこそ生き、残された者たちもその死に呪縛されて生きていることにあらためて気づかされる。このマニャックにして斬新な問題設定をまず評価したい。思えば、『源氏物語』は主人公光源氏の誕生を語るにあたって、母桐壺更衣の死を最初においていたではないか。

本論文のなかで、第一章の「から」「かばね」「ほね」「こつ」についての考証も大変有益なものだが、なんといっても、第三章の一連の論考は、「骸」をめぐっての『源氏物語』固有の死生観を摘出しており、新たなる「宇治十帖」論の誕生と評し得る。第二章第一節で、塩見氏は死と葬送のスタンダードな形式を葵上の死をめぐる表現に認めていたことを確認されたい。人々はその死を悲しもうとも、いずれ死を受けいれるにいたるとしていた。葵上という源氏の寵薄い女性がその対象であるところに、いささかのアイロニーがあるかと思われるが、もっとも成功した葬送儀礼である点は動かない。それとの距離をはかっての、「宇治十帖」論ということになる。「骸」をみないがゆえの執着、「骸」へのフェティシズム、「骸」のない葬送、そして火葬の煙をみても死んだとの実感をもてない人々。様々なバリエーションがあろうとも、これらはまさに死を受けいれることができない迷妄の世界そのものであり、だからこそ「亡き魂」の行方がここでは問題にされることもないとい

う。

すぐれた分析である。しかし、若干注文をつければ、正編世界(「桐壺」から「藤裏葉」までの三十三帖)における死の問題についてもう少し言及すべきであろう。そもそも本論文では、桐壺更衣の死、紫上の死、さらには主人公源氏の死の問題についてはふれられていない。桐壺更衣の死をめぐって、母北の方・桐壺帝・主人公源氏の受けとめ方はそれぞれであり、また紫上についてなぜ仮死と本当の死という二段構えが必要とされたのか。さらにこれらでは、「骸」→火葬→「魂」という展開をたどっており、「魂」の行方が最後は問われていることからも、「骸」に固執しつづける宇治の世界とは異なり、正編ならではの死生観であると知れるわけだが、とはいえ、葵上のスタンダードな葬送とはやはり異質であろう。『源氏物語』全体を総覧すべく、正篇についての議論をさらに精緻にする必要がある。そうすることで、「宇治十帖」論も一段と鮮やかな相貌のもとに蘇ることであろう。

また、塩見氏のセンス溢れる読みが遺憾なく発揮されているという意味で、第二章第三節の「篝火」巻論、そして「足」の欠損を論ずる第二章第二節を評価しておきたい。夕顔霊が降臨する不気味な物語として「篝火」巻を解読しており、篝火の夜景という従来の美的解釈をはるかにこえている。女三宮との密通という源氏世界の侵犯によって、柏木が「足(性器)」を破損させるという議論も、そこを核として日本版「オイディーポス(腫れた足)」の系譜を考えることが可能であろう。補論の『栄花物語』論も秀抜だが、展開の余地がいまだ残されている。「はかなくて」として時間の進行を語り、人々の生き死を虚無的に語りつづける『栄花物語』の歴史叙述の在り方とそれはどう関係づけられるのか。そして最後にもう一つ、塩見氏には是非、平安時代文学総体の問題へと論を展開させていただきたい。挽歌や哀傷歌とは何かという和歌文学の問題はもとより、物語文学の始発たる『竹取物語』にしても、かぐや姫の月への帰還(死)を前提に、「今は昔、竹取翁といふものありけり」と語り始められていた。また、女子の死を最初におくのが『土佐日記』の世界であり、『和泉式部日記』も恋人を失った直後の虚脱した作者の心境を叙すことから始まる。平安時代仮名文学の根底には、「死」の問題が常にあり、そのことの意味を問うていただきたい。塩見氏の研究は、いまだ論じ得ていない部分を残すも、はなはだ独創的なものであり、しかもあらゆる方向に発展しつづける可能性をも孕んでいる。

以上をして、塩見優氏の論文が博士（日本語日本文学）の学位にふさわしい業績であることを審査員全員一致で承認した次第である。

以上

論文審査主査　　神田　龍身　教授
鈴木　健一　教授
松岡　智之　特別非常勤講師
（お茶の水女子大学准教授）